

前田眞治(執筆)

《標準理学療法学・作業療法学・言語聴覚障害学 別巻》
脳画像

評者 網本 和

首都大学東京健康福祉学部理学療法学科

日本の理学療法士が担当する症例のうち最も頻度が高いのは脳血管障害の30%であり、2位の骨折19.2%を大きく引き離しています(『理学療法白書2016』より)。したがって、多くの理学療法士にとって脳血管障害の評価と治療は日々つきつけられる喫緊の課題です。特にその病態の理解、予後予測、理学療法治療計画のためには「脳画像」の理解が欠くことができないものになっています。

学生の頃から大変な思いをしてこの「脳画像」を理解しようとして、何度もくじけそうになった経験は誰しもあると思います。何故くじけそうになるのでしょうか。最初にBrodmannの脳地図から始めてしまうと、脳の解剖図の膨大で複雑な部位、名称に「これを覚えなくてはならないのか?」という思いにかられるのでしょうか。そしてこれがとりわけ重要な点ですが、実際の臨床症状との結び付きのイメージがないまま、やみくもに覚えようとしてしまい脳の迷宮をさまようことになるのです。

そんな迷える子羊たちにとって、本書はまさに闇の中の一すじの光、福音とでも言えるものです。前田眞治先生が長くコメディカルスタッフのために教育してこられた内容がまとめられた本書は、CTやMRIの原理という基本中の基本から説き起こされ、脳画像スライスの詳細なレベル別解説、血管支配との関連、機能局在へと進みます。さらに脳血管障害、頭部外傷、脳腫瘍、認知症、神経難病、その他、とそれぞれの臨床症状と照らし合わせた脳画像の意義が述べられます。特に前田先生のご専門である“高次脳機能障害”に関する記述は具体的で臨床的示唆に富むものです。カラー印刷で構成された画像および図は、精細で美しく(この書評ではお見せできないのが誠に残念です)学生や初学者だけでなく練達の臨床家にもインパクトを与えてくれます。

前田先生が「序」のなかで述べているように、「脳

画像から機能障害を読み取るためには症状の情報なしに画像から推測する方法と、実際の症状から脳画像に現れるものの双方向から考察していくことが重要である」との指摘は、脳画像理解への王道と言えるかもしれません。その道のりは長く険しいとしても、本書で掲げられた目標はプロメテウスが与えてくれた火のように明らかなので、もう迷うことなく歩を進めることができると確信します。学生から臨床家まで、幅広い読者に本書のエッセンスをぜひ味わっていただきたいと思います。



B5判・176頁
定価：本体 3,500 円＋税
医学書院刊、2017 年